

人類よ起ち上がれ!

ムーンマトリックス

[覚醒篇①] *Human Race Get Off Your Knees*
David Icke

マインドに呪縛された人類 ～私を嘲笑せよ～



デーヴィッド・アイク
為 清勝彦 訳

この本を読めば「世界の本当のしくみ」すべてが分かる!
しかし、知れば相当なショックを受ける。
だから覚悟ある人だけに読んでほしい!!

デーヴィッド・アイクの集大成全10巻本、
いよいよ刊行開始!





006

ムーンマトリックス「覚醒篇①」

デーヴィッド・アイク
訳 為 清 勝 彦

ヒカルランド

SAMPLE

ライオンのごとく起ち上げれ

自由とは何だ？

隷従れいじゆうとは何か？ と問えば、誰でも答えることができる

まさに奴隷と名付けるべき存在に

あなた方はなつてしまった

隷従とは、労働することだ

暴君の暮らしを支える監獄の中において

その日の四肢ししの生命を維持するだけの賃金を得ることだ

あなた方は、彼らの織機オリにされ、

鋤すきにされ、剣けんにされ、鋏くわにされ

自らの意志を曲げられ、あるいは自ら望んで
彼らを守り、彼らの養分となる

隷従とは、弱りきった子供たちと、

その痩せ衰えた母親たちを見ることだ

荒涼とした冬の風は冷たく

私がかく言う間にも死んでいく

隷従とは、飢えることだ

暴動の中、富裕者はエサを投げ落とす

肥え太って寝転んだ犬に

隷従とは、昔の暴君が労働から搾取さくしゆしていたより

何千倍も多くを

金の幽霊に奪い取らせることだ

紙のコイン、捏造ねつぞうされた権利証書を

あなた方は

大地から継承した価値あるもののように
しがみついている

隷従とは、魂が奴隷になることだ

自らの意志を自ら決めることなく

他人が全て決めてしまう

そして、くどくどと不平を言う

弱々しく虚むなしい言葉をこぼす

隷従とは、暴君の連中が

あなた方とその妻の上に乗るのを眺ながめていることだ

血は露のように草地を濡らす

そして隷従とは、復讐かくしゅうを思うことだ

血と血を交換することを

間違いを間違いと交換することを

猛烈に渴望かつぼうすることだ

だから、強いあなた方は、そうすべきではない



これが隷従たいていだ

巢ねの中なかにいる野生の獣、未開人ならば

あなた方のように耐え忍ぶことはない

そんな苦難くるなんがあるとは知ることもない

自由とは何か？

生きながら墓場むらばにいる奴隷たちが

この問いに答えることができるなら

暴君は夢の幻まぼろしのように逃げ失せるだろう

恐怖を知らぬ自由な者たちよ
大集結するのだ

どこまでも平原の広がる
イングランドの地に

頭上に広がる青い空

踏みしめる緑の大地

全てが永遠の荘嚴の証あかしとなる

あなた方はいつ終わるとも知れぬ苦境に置かれたままでいるのか
それとも、感じ、見るのか

あなた方の国は
血と金の対価として売買され
失われたことを

大集結するのだ
おごそ
巖かに

そして、きっちりとした言葉で宣言するのだ
あなた方は自由であると
そのように神はあなた方を創造したのだと

~~~~~  
そして、その言葉が  
抑圧の終焉しゆうえんを告げる雷鳴となって  
ひとりひとりの胸に、脳に、  
鳴り響いていく



何度も何度も

まどろみから醒めた獅子のごとく起ち上かれ

制圧不可能な人数となつて

眠っている間につながれた鎖を震わせ

露のように大地に振り落とせ

あなた方は多勢だ

相手は無勢だ

パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) の『無秩序の仮面』にある詩より抜粋。1819年にイギリスのマンチェスターで、議会・選挙の改革を求めて集まった人々を政府が虐殺したピータールー事件を受けて書かれた。

もしも……

もしも、あなたが何もかも失いつつあり

それをあなたのせいにされているのに

あなたが冷静でいられるならば

もしも、全ての人があなたを疑っていても

あなたが自分を信じていることができるならば

しかもあなたを疑う人々を許容することができるならば

もしも、あなたが待つことができ

待つことにうんざりすることもなく

嘘をつかれることにも嫌気がさすこともなく

虚偽の中で駆け引きをすることもなければ

憎悪されることに疲れることもなく

自制心を失って憎悪し返すこともなければ

そして、それでも善良に見えすぎることもなく

あまり賢く話をしすぎることもないならば

もしも、あなたが夢を見ることができれば

そしてその夢に自分を支配させないようにできるなら

もしも、あなたが考えることができるなら

そしてその思考を自分の目的にしないようにできるなら

もしも、あなたが勝利と破滅に遭遇し

その両者とも同じ詐欺師として扱うことができるなら

もしも、あなたが語った真実を

愚かな者を騙<sup>だま</sup>そうと悪党どもが捻<sup>ね</sup>じ曲げているのを

耳にしても耐えられるならば

あるいは、あなたが生命をかけたものが破壊されるを見ても

身を落とし、ボロボロになった道具で作り直すことができるならば

もしも、あなたが獲得したものを全てをひとまとめにして

一回勝負のコイン投げのバクチに賭け

何もかも失い、最初からやり直すことができるなら

そして、その損失のことを嘆いたりしないならば

もしも、あなたの心と<sup>ハイト</sup>度胸と体力が

全て失われて久しくとも

それをあなたの番が来たときに役立てることができたら

そして、あなたの中にはそれに対して「踏ん張れ」と言うだけの

意志しか残っていないくとも踏ん張ることができたら

もしも、群集と話し、あなたの美徳を保つことができるなら

あるいは、王たちとともに歩きながらも、庶民と親しむ態度を失わないならば

もしも、敵も親友もあなたを傷つけることができなければ

もしも、あなたにとって全ての人が大切であり

かといって誰かが特別に重要というわけでもないならば

もしも、厳しい1分を

長距離走の60秒で満たすことができるならば

全世界はあなたのものだ

あなたは全てを手に入れている

しかも、それだけではない

あなたは「人」になろうとしているのだ

わが息子よ！

ラドヤード・キプリング

ようやく気付いたと思う……

星の美しい夜

パレットを青と灰に塗る

夏の日を外を眺める

私の魂の中の暗闇を知る目で

丘陵に生じた影

木々とラップパズイセンをスケッチする

雪の布が敷かれた大地の色に

そよ風と冬の冷気を受ける

ようやく気付いた

あなたが私に言おうとしたことを

そして、あなたがその正気さゆえにいかに悩んだかを  
そして、あなたがそれを解き放とうと努力していたことを  
人々は聞こうとしなかった

どのように聞いてよいか分からなかったのだ  
だが、今なら、おそらく聞こうとするだろう

星の美しい夜

明るい炎を出して燃える花

紫の靄もやの中に舞う雲

色相を変えて

チャイナ・ブルーのゴツホの目に映る

琥珀色こはくの朝の穀物畑

風雨にさらされ、苦痛に並んだ表情が

芸術家の愛の手によりやわらぐ

ようやく気付いた

あなたが私に言おうとしたことを

そして、あなたがその正気さゆえにいかにも悩んだかを

そして、あなたがそれを解き放とうと努力していたことを

人々は聞こうとしなかった

どのように聞いてよいか分からなかったのだ

だが、今なら、おそらく聞こうとするだろう

ドン・マクリーン



## 人間の物語

多くの羊を所有していたとても裕福な魔術師の物語が東洋にある。この魔術師はとてもケチな男でもあった。彼は羊飼いを雇いたくなかったし、羊たちが草を食む草原の周りに柵を建てることもしたくなかった。そのため、しばしば羊たちは森へと迷いこみ、谷に落ちたりしていたが、何よりも羊たちは魔術師が望んでいるのは羊たちの肉や皮膚であることを知っており、それを好ましく思っていなかったたので、逃げ出していた。

ついに魔術師は解決策を思いついた。羊たちを催眠術にかけ、まず第一に、羊たちに自らは不死身であると思わせた。そして、皮膚をはぎとるときも何も危害を加えることはない暗示にかけた。そればかりか、逆に、羊たちにとって良いこと、喜ばしいことだと思わせたのである。次に魔術師は、自らのことを羊たちをこよなく愛する善良な主人であり、羊たちのためなら何でもするつもりだと思わせた。3番目に、もし羊たちの身に何か起きそうであれば、そのときに起きるわけではなく、ましてその日に起きるわけではなく、それについて思い悩む必要はないと教えた。そしてさらに魔術師は、羊たちに自らが羊ではないと思わせた。その一部にはライオンだと思わせ、一部には驚だと思わせ、一部には人間だと思わせ、

残りには魔術師だと思わせた。

こうして対策したことで、羊に関する懸念や心配事は全て解消した。羊たちは二度と逃げることはなく、魔術師が肉と皮膚を要求するときをおとなしく待つだけになった。

この物語は、人間の置かれている状況を見事に描いている。

G・I・ガージエフ

(P・D・ウーズペンスキーが1949年の著書『奇跡を求めて (In Search of the Miraculous)』に引用したもの)

不可能はない——不可能と考えない限りは

◇壁を通り抜けて歩くことができると想像してみよう

わざわざドアを開ける必要はない。単純に通り抜ければよい。建物の周りを歩く必要はない。壁や柱を通り抜けて入り込み、反対側の壁から抜け出せばよい。山を迂回<sup>うかい</sup>する必要はない。まっすぐに歩いて入り込んでいけばよい。腹が空いたら、冷蔵庫のドアを開けることなく中にあるものを取り出すことができる。うっかりして自動車のドアを閉じ込む心配もない。ドアを通り抜けて車の中に入ればよい。

◇思いのままに出現したり消滅したりできると想像してみよう

学校や会社に車で行くのではなく、単純に消滅して、学校の教室や職場で再び物質化すればよい。遠くの場所に行くのに飛行機を必要とすることもない。単純に消滅して、目的地で再び物質化すればよい。通勤時間帯に道路の渋滞にはまることもありえない。自動車ごとまとめて消滅し、目的地で再び物質化すればよい。

◇X線の視力を持っていると想像してみよう

遠くのところから事故を見ることができると想像してみよう。消滅し、事故の現場で再び物質化すると、たと

え瓦礫がれきの下に埋もれていようと、どこに犠牲者がいるか正確に発見することができる。

◇開けることなく物体をつかむことができると思像してみよう

みかんの皮をむいたり、切ったりしなくとも、実を取り出すことができる。患者の身体を切開することなく内臓を治してしまえば、痛みも大幅に軽減され、感染のリスクもなくなり、達人の外科医として称賛されるかもしれない。皮膚を通り抜けて直接患部に手を伸ばし、精密な手術を行うことができる。

こんな能力があれば、犯罪者はどんなことをするだろうか。嚴重な警備の銀行に侵入できるだろう。貴重品の入った金庫の厚いドアを通り抜け、中に入って持ち出すことができるだろう。警備員が射撃しても、弾丸が身体を通り抜けるので、やすやすと歩いて立ち去ることができるだろう。

こんな能力があれば、監獄に囚人を閉じ込めておくこともできない。何であろうと我々に秘密にすることもできない。どんな宝物も我々から隠すことができる。我々を阻はばむものはない。我々は本当の意味で奇跡の働きをすることができる。人間たちの理解の範囲を超えた技能を使うことができる。我々は万能になる。

◇そんな神のような能力をどんな存在なら保有できるのか？

(答え) より高い次元の世界の存在である。

ミチオ・カク博士(『超空間——平行宇宙、タイムワープ、10次元の探究』(邦訳⇨翔泳社刊)の著者で物理学者)

いかなる嵐の中でも堅固に私を支えてくれた非凡なるリンダに、

本書の執筆中に我々を残して去ってしまった偉大な友、すばらしいイーヴァに、

さまざまな助けをしてくれたケリー、ガレス、ジェイミーに、

揺るぎない支援を続けてくれたキャロル・クラークとリンダ・スミスに、

私が誇りをもって友と呼ぶクレド・ムトウワに、

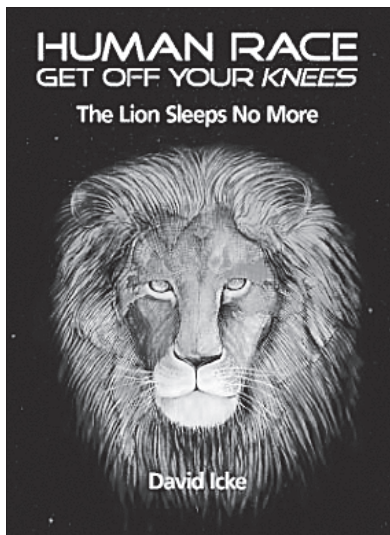
仲間のニール・ヘイグとマイク・ランバートに、本書を捧げる。

そして、「支援」すると称して私の人生に介入し、私の健康、仕事、金銭面に多大な損害を与えた利己的で破滅的な嘘つき、詐欺師にも。あなた方がいようとも、私はやるべきことをやっただし、これからもやるべきことをやる。あなた方は、自分のやったことを背負って、これから残りの人生、そしてその先も生きることになるだろう。

本書の案内（訳者まえがき）

本書は、2010年4月にイギリスで発行されたデーヴィッド・アイクの『人類よ、起ち上られ——眠れる獅子が目覚めるとき』（Human Race Get Off Your Knees: The Lion Sleeps No More）の翻訳である。原書は約700頁の辞書のように分厚い一冊になっており、机に置いて読まなければ手が疲れるほど重い。この貴重な考察と情報の詰まった本を、日本の読者の皆様には、じっくりと快適に読み進めていただきたいという思いから、日本語版では全10巻に分冊し、手に取りやすい文庫版で出版することになった。

よく「世界の仕組みが分かる本」といったキャッチ・コピーで販売されている本があるが、その宣伝文句はまさに本書のためにある。決して誇大広告ではなく、この本を読めば、本当に世界の仕組みが分かる。もちろん、アイク自身が1990年以降、常に新しい事実（正確に言えば、隠れている事実）を解明する旅を続けていると書いている通り、本書で全てが分かるわけではない。だが、少なくとも大半の読者の方にとって、まったく現在とは異なる世



原書の表紙。顔一面世界地形紋様のライオンがじっと見据え「人類よ、起き上がれ！」と。獅子吼より凄みが……。



界認識をもたらずはすはずである。それも、ちょっとやそつと異なるのではなく、想像を絶した認識の変容をもたらずはすはずである。これ以上知りたくない」と拒絶きよぜつしたくなるほど世界の仕組みが分かる。

## 各巻の構成

各巻の概要は、次の通りである。

【第1巻】我々は通常、自分の身体やものの考え方、自分の名前などをもって「自分」と思っているが、実はそれは錯覚であるということ（第1章）、そして、アイクが1990年に覚醒の旅を始めるまでに辿たどった人生経験の必然性（第2章）、覚醒の旅を始めて以降、世間から大々的に嘲笑ちやうしやうされることで真の自由を得たこと（第3章）が記述されている。

【第2巻】第4章より、アイクが過去に行ってきた真実の解明の内容が、解明を行った順に（解明に導かれた順に）紹介してある。太古の「黄金の時代」の終焉をもたらしした地殻変動（大洪水）の後にメソポタミアの地に出現したシュメール文明。それが、バビロン、エジプト、ローマ、ロンドン（バビロンドン）と変遷し、今日の世界支配ネットワークになった（第4章）。イルミナティの地球規模の蜘蛛くもの巣（ウェブ）、ピラミッド支配構造（第5章）。

イルミナティの血筋の中核をなすロスチャイルド家とその金融支配の手口（第6章）。「ユダヤの陰謀」と言われるが、ユダヤ人はスケープゴートに過ぎない。陰謀を巡らしているのはロスチャイルド・シオニストである（第7章）。

【第3巻】人類支配の基本テクニクである①PRS（問題を作る↓人々に反応させる↓支配に都合のよい解決策を実施）、②全体主義者の忍び足について、9・11事件、地球温暖化詐欺などをケーススタディにして解説（第8章、第9章）。

【第4巻】人間の基本的な行動や感情を支配する爬虫類脳。現在の人類は爬虫類人の遺伝子操作によって創造された（第10章）。世界各地の古代神話・伝説・信仰に共通する蛇崇拜は、現在の悪魔崇拜やさまざまなシンボルとなって受け継がれている（第11章）。

【第5巻】言語に暗号化されている蛇の人類支配を言語学の視点で分析（第12章）。爬虫類人はどこに在るのか？（地下世界、変身のことなど）（第13章）。月は、自然の天体ではなく、工作された宇宙船である可能性を検証（第14章）。

【第6巻】アマゾンの熱帯雨林で聞こえた「声」のメッセージ。愛だけが真実であり、他は何もかも錯覚だった（第15章）。人体をコンピュータにたとえ、宇宙をインターネットにたとえるアイクの宇宙論（第16、17章）。時間と空間という錯覚（第18章）。

【第7巻】月のマトリックス。月からの人類支配の仕組み（第19章）。

【第8巻】 ゲーム・プランⅠ 人口削減と心身への攻撃（第20～22章）。

【第9巻】 ゲーム・プランⅡ 世界政府と自由の剝奪はくだう（第23～25章）。

【第10巻】 ゲーム・プランⅢ 社会福祉の正体（第26～28章）と結び。

## デーヴィッド・アイクについて

アイクは、イギリスの労働者階級（一般家庭）に生まれた。学校の勉強は嫌いでサッカーに活路を見出し、プロのサッカー選手になったが、身体を壊したため、BBCのスポーツ解説者に転身した。その後、環境問題に目覚め、緑の党で政治活動を行ったが、その偽善に氣付いた頃、1990年に霊能者を介してメッセージを受け、人類を支配する勢力の真相を暴露する現在の活動に入っている。

詳細は、本巻の第2章と第3章に書いてあるが、これは単なる自叙伝ではなく、覚醒とは具体的に何を意味するのか、そして人間はどのように段階を追って覚醒していくのかという一つの道筋を示している。

日本では太田龍氏（1930～2009）がアイクを精力的に紹介してきた。太田龍氏の招きで過去に2回（2002年4月、2008年2月）日本を訪れ、東京で講演会を行って

いる。第3章（214～215ページ）にこれまでの著作リストを掲載している。

### これは現代の「お経」だ

アイクは、本書の全体を通じて比較的平易な言葉で記述しているが、その内容の深遠さは、仏教の経典と同レベルであると私は思っている。例えば、「タイム・ループ（時間の環）」という表現が出てくるが、これは輪廻りんねのことであろう。根拠もなく「人生は一度きり」と言われるが、人間は生まれたときに、生前の記憶を消され、多くの人が死ねば何もなくなくなると思っっている。あるいは、死後の世界（状態）について考えることを拒絶している。そのため、日々の仕事や家事に忙殺されるだけで同じことを繰り返しては生涯を終え、その同じような「生涯」を転生てんしょうして何度も繰り返す。

これは個人の一生だけでなく、人類の文明全体にも言えることだろう。世界中に存在する遺跡などから、現在の主流の歴史学では認識されていない太古の文明が数多く存在したことは明らかであるが、人類はその記憶を消去されている。そして同じ過ち（文明の興隆・衰退）を何度も繰り返して、今再び、文明が減びる時期を迎えている。

本書のタイトルにある「起ち上かれ」とは、暴動や決起あおを煽っているのではなく、勇気を

もって現実の本当の姿を直視し、それぞれの人が自らの現実認識を改め、目を覚ますことである。私は解釈している。これは、輪廻からの解脱げだつを説く、現代版の「お経」なのだ。

特に私は、本書全体を通じて、第3章の次の文章が最も気に入っている。

……良い人間関係であろうと悪い関係であろうと、誰にでも言えることだが、心マインドで認識する限りは「必然」(的な人間関係)とは思えないだろう。だが、偶然に人間関係が生じることはない。特に家族についてはそうだ。家族の人間関係に問題があるならば、なぜそうなっているのか、あなたにどんなメッセージを伝えようとしているのかを自問してみるとよいだろう。もしかすると、変わらないといけないのは、あなた自身かもしれない。あるいは、家族の血のつながりという錯覚を断ち切り、本当の人間の絆きずなは根源意識を介したものだということに気付くよう求められているのかもしれない。この観点を得れば、今までの人生をずっと一緒に過ごしてきた家族よりも、10分前に出会った人のほうに、共通するものをたくさん見出し、太い絆を感じることも可能である。家族に固い絆がある場合でも、実は血縁マインド(これは心の錯覚だ)ではなく、根源意識によるものである。

インターネットでコミュニケーションができるようになった今日、「10分前に出会った人のほうに、共通するものをたくさん見出し、太い絆を感じる」ことを実際に経験している人も多いのではなからうか。また、ここに、全ては必然ということの本当の意味がある。悪い人間関係を終わらせたいのであれば、その人間関係の持つ意味を理解すればよいということだ。そうすればその人間関係の必然性が消えるため、人間関係が終了（疎遠になったり断絶したり気にならなくなったり）する。これは個人的な人間関係だけでなく、政治的な支配・被支配の関係にも言えることだろう。邪悪な人々に支配されている（これは悪い人間関係の一例だろう）のは何故か？ その意味を知れば、そうした人間関係は終了するというのである。逆に言えば、そうした嫌な人間関係が続いているのは、その必然性をいまだに理解できていないからと解釈できる。

### あまりにも単純なために難解な「自己」認識の呪縛からの脱出

冒頭の第1章は、「私」とは何か、「自分」とは何かという、極めて重要なテーマである。どんなに深く陰謀を解明し、宇宙の果てまで追究しても、自分とは何か、が分かっているなければ何も分かっていることと同じではなからうか。

17世紀にルネ・デカルトは「我思う、ゆえに我あり」という有名な言葉を残した。これが近代的自我の確立などと言われる。まさにそうなのだ。人間は思考する。他の生物と違って、発達した大脳新皮質を使って思考する。そして（特に近代以降の個人主義の時代では）その思考そのものを「自分」だと認識している。もつと言えば、氏名や肩書きなどの「言葉」を自分だと認識している。

思考するからこそ、自分とそれ以外（他人）を分けることができる。日本語の「わかる」も「分かる」と漢字を当て、「分けることができた」という意味である。

その対極に、ニューエイジ思想的な言葉ではあるが「ワンネス」とか、「全ては一つ」という認識がある。あるいは「全体主義」もそうかもしれない。エーリヒ・フロムは、『自由からの逃走』という有名な著書で、中世社会の束縛（これは共同体の一体感・安心感というポジティブな意味もあるだろう）から解放され、自由な個人となった近代人は、孤独感・無力感に苛まれることになり、それがファシズムへの傾斜をもたらしたと述べている。

いったい人間は、「思考⇨孤立した自己」であるときと、「共感⇨ワンネス」の中にいるときと、どっちが幸福なのだろうか。その答えを出すのは簡単ではないだろうが、やはり両者のバランス（中庸）が大事なのではないかと私は思う。

どちらかと言えば、現代社会では「思考⇨孤立した自己」認識に偏っており、孤立させた

自分を他人と競争・闘争させ、そこで優越感を抱くことに喜びを感じたり、逆に劣等感を抱くことで自己嫌悪に陥ったりしている。ワシネスの状態で生まれた子供たちに、受験競争を通じて競争することを教育し、分離した自己意識を植え付けている。人生相談のコンサルタントは、他人より何倍も努力すべきだとアドバイスする。

だが、社会全体で考えると「人より何倍も努力する」ことは、いったいどんな意味を持つのだろうか。いまだに政治家は経済成長を唱え、国の競争力を維持するなどと言い、実業家は企業の利益成長、競争力を価値観としている。だが、人類全体で見たとき、そうした人間同士の競争にどのような意味があるのだろうか。最終的に誰がトクをし、誰がソンをするのだろうか。もちろん、「誰」というのは、人間に限らない。地球（水）を汚すだけの結果になっていないだろうか。

アイクは、特に9・11事件以降、注目されるようになった陰謀論者の一人であるが、第1章に述べているような自己認識を踏まえて陰謀の解明を行っていると、他の主要な陰謀論者とは際立った違いになっている。陰謀の解明というのは、簡単に言えば「犯人探し」であり、「悪者」を特定することである。もちろん、その「悪者」が自分自身であるわけがないという前提に立っている。例えば、自分は光の戦士であり、闇の勢力を駆逐するのだと勇ましいことを言う人もいる。その基本認識は自他の「分離」に基づいており、自分から



「敵」として分離した存在をやつつけることに執念を燃やしている。

だが、実際には、本書で詳しく述べてあるように、全ては我々の内なる世界で発生していることであり、自分とは分離した何者かに全ての責任を押し付けても、根本的な解決にはならないのである。機密解除になった政府文書を調べたり、古代の文献を調べたり、秘密の知識を調べたりすることで、我々の外側にある（と思っている）世界を客観的に理解することは非常に重要ではある。だが、それはあくまで我々が自分自身を正確に深く理解するための作業であって、存在しない外側の世界に犯人を見つけることが最終目的ではない。それは、先述の悪い人間関係の「必然性」を消去するための作業でなければならない。

**我々は何重もの殻からに覆おおわれている**

我々は、新たな知識を得たり、新たな発想を得るために、本を読むわけであるが、多くの場合、自らの既存の現実認識の範囲内で、理解可能な範囲だけを読み取っているのだろうと思う。同じ本を読んでも、読むたびに違う発見をすることがある。当然ながら本の内容が変化したわけではない。読み手の意識が変化しただけである。本書は、まさにそんな本になるのではないかと思う。

本書を手に取りられる方ならば、ロックフェラー、ロスチャイルド、グローバル企業による経済的な支配、マネーによる支配、マスコミによるマインド・コントロールについては、ある程度理解されているに違いないと思う。さらに、遺伝子組み換え食品や医薬品による人体の支配（思考能力を奪ったり、身体機能を損なう策略）についても、ご存知かもしれない。しかし、アイクの解明によると、爬虫類人による人類支配は、そうしたレベルを遥かに超え、我々の想像がまったく及ばないレベルにある。我々が「自然現象」と思っている範囲にまで及んでいるのだ。今年（2011年）3月11日の地震と津波災害、福島原発事故について、アイクがどのように解釈しているかは、巻末のコラムにまとめて本巻に収録しているが、人工地震だけでなく、そもそも人間の寿命、生命活動そのもの、食べなければ生きていけないことなど我々が「本能」と思っていることまでが、実はコントロールされているというのが、本書にある「月のマトリックス」である。月から送信される信号が、人間の脳やDNAに働きかけ、人間の行動を左右しているというのだ。

「そんな荒唐無稽ことうむけいな」と思われるだろう。それは正常な感覚だと思う。だが、少なくとも私は、こうして翻訳を終えた今、それが事実なのだろうと思っている。そして、これまで私の思考の中に存在していた「人工」と「自然」という区別（分離）が、言葉の定義が、ガラガラと音を立てて崩れ去っていった。そして、よくよく考えれば、全てが我々の内にある世界

であり、我々の想念が作っている現実ならば、そもそも月に限らず、太陽も何もかも含めて「自然」など存在しないということも、今となつては当たり前前に思えてくる。なぜ今までこんな単純なことに気付かなかつたのか、逆に不思議なぐらいである。

マスコミのマイインド・コントロールのテクニクに「フレーミング」というものがある。これは、いろいろな意味やイメージを、短い語句のフレーム（枠）に入れ込むことである。人間は、肉體作業だけでなく、考えることも面倒に感じる習性があり、なるべく考えないで済ませようとする。その習性を利用し、言葉を飾り付けて梱包し、特定の解釈をさせたり、他の解釈をさせないようにするテクニクである。例えば、「陰謀論」という言葉に、胡散臭いとか、怪しげだというイメージを枠入れしておけば、ツイッターなどで「また陰謀論が湧いてきた」などと短い無意味なメッセージだけで中傷することもできる。ある語句にあらかじめ意味がリンクしていれば、それ以上考えなくて済むため、楽である。精神的な近道になり、情報処理が迅速になる。ところが、既存の常識を覆すような話を聞くと、この「近道」が利用できなくなる。今まで信じていたことをリセットして、考え直さなければならなくなり、面倒なのだ。

また、自分の思考を自己であると認識している人にとっては、既存の思考と矛盾するような事実を知ると、自分の存在そのものを否定されたように感じる。あるいは、自分の縄張り

を荒らされ、侵害されたように感じる。爬虫類脳の発動である。こうして、いろいろな意味で、人間の脳は、現状の思考を維持・固執こじゅうし、その硬直性に安心を感じるようにできているようである。

学校の成績がよい子供や、社会的にも知的水準が高いと言われる人々は、記憶力がよく、数多くのフレームを記憶することで情報処理を高速化しているだけのことが多いのではなからうか。確かに、ものごとを深く考えすぎると、何も行動できなくなる。日常生活に支障をきたす。我々は、現実生活に適応するために、さまざまなことをあえて深く考えず、「常識」とか「当たり前」ということで片付け、やり過ぎしている。「何で?」「どうして?」を連発していた子供の頃の好奇心を失っている。その「幼稚」な探究心が、本書を読む上では重要だと思う。

「思考停止」という言葉がある。本当に思考を停止できるならば、それは座禅で無になるのと同じであり、素晴らしいことだと思う。思考こそが「分離」意識であり、狭い自己意識を生み出しているからだ。だが、一般に「思考停止」と言われているのは、ものごとの意味を考えることなく、あらかじめフレームにセットされた意味を、コンピュータのプロセッサのように寸毫すんごうも間違えることなく正確に処理（転送）してメモリに受け渡しているだけのことだろう。その証拠に、認知症になった老人でも新聞を読む。脳内出血で断片的にしか記憶の

|                     |                |    |
|---------------------|----------------|----|
| ライオンのごとく起ち上がれ       | パーシー・ビツシユ・シエリー | 3  |
| もしも……               | ラドヤード・キプリング    | 10 |
| ようやく気付いたと思う……       | ドン・マクリーン       | 14 |
| 人間の物語               | G・I・ガージェフ      | 17 |
| 不可能はない——不可能と考えない限りは | ミチオ・カク博士       | 19 |
| 献辞                  |                | 22 |
| 本書の案内(訳者まえがき)       |                | 23 |
| 前文 誰かがドアを叩いている      |                | 44 |

第1章 私は「デーヴィッド・アイク」ではない——コンシヤスネス 根源意識の「知ること」に接続せよ！

肉体とは、永遠の根源意識が「コンシヤスネス体エクスピアレンス」を積むための乗り物 48

この仮想現実の宇宙で、気付くべきは「ザ・マインド唯一の心」 52

私は誰だ？——「物質世界」は我々の脳内に存在しているだけ 56

原初の無限の能力を心全加 全能 身に閉じ込めた「シャドウ・ビープル影の人々」 63

地球上で今最も危険な破壊物——それは「クレバー知恵のない賢さ」である！ 66

「無限の認識」を防げる高密度（石頭）になるな！ 73

「認知的不協和」こそ、地球規模の支配体制に不可欠な要素！ 77

静かな声から人々を遠ざける——エリート家系と秘密結社ネットワークのやり口！ 82

心理的ファシズム——頭が「標準」で満杯のジャーナリスト、大衆 87

直感に生きよ——あえて人とは違う存在になる！ 91

洗脳を解除して、心も味方につけよう 94

第2章 壁に嵌め込まれたレンガになるな——静かな声からの直感を得よ！

大海（根源意識）の一滴

あなたも私も「一つ」、それが「本当の私」「真の私」

100

賢い労働者階級出身など

私の生い立ちには、私の旅にとって最適な内容だった

102

長年の体験から何も学んでいない年老いたバカ

106

「おい、誰かゴールキーパーやる奴いないか？」「ハイ、やります」

112

心に服従すると、運命は窒息してどこかに逃げる

115

人生は、しばしば最悪の事態を装って素晴らしい贈り物をくれる

118

自分こそが夢を実現「こんばんは、BBCスポーツです」

123

錯乱業界を辞め環境保護経由で政界へ

127

「政治」とは、「たくさん」の「タニ」

134

ジャーナリズムとは、露骨なまでに心の産物

138

第3章 デーヴィッド、どうなってるの？——**液体的物質世界に回帰するときが来た！**

「マインド心の大幅換をもたらししたサイキック霊能者との出会い！」 144

「波長の異なる「世界」——並行宇宙パラレルワールドが無限にある世界を知る！」 146

「ヒューストンへ、我々は宇宙人との接触到に成功した」 152

「緑の党も知能に支配されている心マインドの構築物」 157

「全ては準備されていた——除去すべき世界の闇の真相暴露」 162

「冷凍の振動」による人類捕獲の「凝固高密度」が破られつつある」 164

「上司私がこれから話すことは、人頭税問題これとは無関係だ——BBCからの追放！」 165

「オレントガイズ静かな声は、ペルーへと私を誘った！」 170

「虫の知らせは、父の死をピタリの中」 174

「丘の招き、体を貫くエネルギー、土砂降り——頭の中のダムが決壊」 176



嘲笑された「神の子」発言だが、「無限の意識」のこと 184

五感の錯覚の「世界」の囚人「心」と根源意識 189

嘲笑を浴びて心監獄と思想警察世間の標準から自由になった私 193

後にして思えば……ペルーでの体験はチャクラの「クンダリーニ」覚醒 195

「発狂」ではない、「真実の振動」による変容なのだった！ 199

現実「世界」は工作された錯覚だった！ 201

狂人扱いの身で大学を巡る講演ツアー 202

然るべき「場所」と然るべき「時期」——予言の中に生き始める！  
カークー元大統領夫妻と必然の隣席も 207

絶対に諦めない——世界講演は50カ国を超えた！ 213

### コラム 3・11地震とフクシマの解明

今、昔爬虫類の視力類人が回復する時代を迎えている 220

|                                                |     |
|------------------------------------------------|-----|
| ニューズレターに見るアイクの真相解明の姿勢                          | 222 |
| H A A R P <sup>ハーパー</sup> は気象・地震兵器だけではない       | 235 |
| 陰謀を説明するときの視点                                   | 242 |
| 「真実の振動」と地球の物理的変動                               | 244 |
| 「真実の振動」と人類の覚醒                                  | 251 |
| 爬虫類人の人類支配と人類の覚醒を阻止する放射線アジエンダ                   | 256 |
| 人間界における目的—— <sup>米国防総省</sup> ペンタゴンの完全支配と日本の再占領 | 271 |
| 放射線を怖がる必要はない                                   | 277 |
| 放射線ホルミシス——被曝の「勢い」が重要                           | 279 |
| 広島・長崎の教訓（玄米食の効果）                               | 287 |

●凡例 本文中（ ）内は訳者註釈。

校正 麦秋アートセンター  
編集協力 守屋汎

ない人間でも、テレビを眺めて楽しむことができる。あるいは、顧客の事情や気持ちを無視して、冷徹にマニュアルに定められた通りの対応をすることができる。

我々は、人間としての遺伝子や脳の構造に由来する生物的な「クセ」のために、硬直的（効率的）な思考に陥り、五感の錯覚から抜け出すことが困難になっている。それを超越することが、肉体次元の克服・超越であり、真にスピリチュアルな生き方ではなからうか。

第1章に述べられた「自己」認識そのものと闘いながら、最後まで本書を読み進めていただければと思う。

2011年7月25日

為清勝彦